俳句ポスト地貌季語　秋　令和六年

東日本　「だだちゃ豆」（だだちゃまめ）

だだちや豆の旗なびきをり船着場　　清水三千穂

庄内地域では枝豆を「だだちゃ豆」と呼んでいる。だだちゃとは庄内方言でおやじ、お父さんを指す。

先年晩夏の暑い最中、出羽三山へ出向いた折に、鶴岡市農業協同組合で売り出している「殿様のだだちゃ豆」の小袋を求めた。袋に謂(い)われこうある。

その昔、城下町・鶴岡が酒井藩だった頃、殿様が大変な枝豆好きで、毎日枝豆を持ち寄らせては「今日はどこのだだちゃの豆か」と聞いたことから、いつからかだだちゃ豆と呼ばれるようになったとか。この枝豆は莢(さや)が茶色を帯び、茶香りという品種。莢が緑色の枝豆より香りと甘みが強い。新潟が原産で省内の地へ移入され、盛んに作られ、さらに東北地域一帯に広まったもの。

東北では枝豆をジンダあるいはズンダといい、宮城県では秋彼岸にジンダ餅を食べるのが慣わし。伊達政宗公が甚太という農民から献上された枝豆を好んだことからという。枝豆談義はみちのく各地の地貌を髣髴(ほうふつ)とさせ、面白い。

掲句は、庄内旅吟。最上川などの船着場では昔ながらの旗を靡(なび)かせながら、だだちゃ豆が売られている。だだちゃの鄙びた響きが土の香りを漂わせている。作者は長野市在住。

西日本　「狐花」（きつねばな）

きつねばな入江に船の入り来たる　　鈴木恵美子

彼岸花の方言である。岡山、広島の二県、あるいは熊野地域ではほかに「狐(きつね)草(ぐさ)」とも呼ぶ。奈良県北部では「狐(きつねのかみそり)剃刀」。

狐を被(かぶ)せた呼称は各地に多いが、その謂(いわ)れを柳田國男は「野草雑記」で狐が出そうな、さびしく気味の悪い場所に繁茂したからでは、と推測している。

墓地に咲くので「死人花（しびとはな）」「幽霊花（ゆうれいばな）」、花の時期に葉葉（はは）（母）がないので「捨子花（すてごばな）」と、いずれも不吉な俗称で呼ばれる。

俳句の季語では「曼殊沙華（まんじゅしゃげ）」が用いられるが、これは梵語で赤い花の意。法華経から出たことばだ。

有毒物質を含むが、地下茎は澱粉（でんぷん）に富み、縄文時代以来、凶作時に食する救荒植物として、西日本では特に栽培されていた。

和歌には詠まれず、俳諧でも敬遠されてきたが、地貌季語の視点に立つとこれほど広く方言や俗称を持つ花は他にない。

掲句は、狐花と船、入り江を見下ろす丘の童画のような景色。作者はかつて岡山県備前市在住。